

令和4年度

岐阜県西濃地区小学校国語科研究部会研究協議会

1 主 催 岐阜県小中学校教育研究会 小学校国語科研究部会

2 日 時 詳細は各校にメールでお伝えします。

3 研究テーマ

【岐阜県小学校国語科研究部会 研究テーマ】

生きてはたらく言語能力を高める国語科学習
—楽しくて、力がつく言語活動の工夫—

4 会の流れ

- ① 開会
- ② 低学年実践提案
- ③ 中学年実践提案
- ④ 高学年実践提案
- ⑤ 講 評
- ⑥ 閉会

生きてはたらく言語能力を高める国語科指導 ～楽しくて、力がつく言語活動の工夫～

1 児童の実態

学級全体としては、文章を書いたり、発表したりする表現意欲が高い反面、語彙の獲得が不十分で、自分の思いを上手く伝えられない児童もいる。

2 願うこどもの姿 (研究テーマ設定の理由)

自分が伝えたい内容を選択し、それらが適切に伝わるための書き表し方を豊富に獲得することを通して、言葉を選んで適切に表現しようとする意欲がもてる児童を目指す。また、国語の単位時間のみならず、日常生活での「書く」ことにおいても、豊かに自分の思いを表現できる児童を目指す。

3 研究内容

- (1) 単元について ②単元を通して、課題意識の連続性がある言語活動の位置付け
(2) 単位時間の学習過程について ③児童が、自己の高まりを自覚できたり、言語の主體的な使い手として自信を付けたりする終末の工夫

4 研究実践

第2学年 単元名：ていねいに かんさつして、しろくしよう

教材名：かんさつ名人に なるう (生活科：ぐんぐんそだて わたしのやさい)

(0) 昨年度の実践とのつながり

昨年度、同地区の教諭が第2学年「せつめいのしかたに気をつけて読み、それをいかして書こう 馬のおもちゃの作り方・おもちゃの作り方をせつめいしよう」の授業実践を行った。生活科「うごくうごくわたしのおもちゃ」と関連付け、おもちゃの説明書を書く。それを観点に沿って推敲することで、より相手に伝わりやすい説明書を書くことができるという実践であった。実践の中で児童は、教師の朱書きクリアファイル(透明ファイルに専用マーカーで書き込んだり消したりできるもの)を基に、「馬のおもちゃの作り方」で学習した説明の工夫を観点として、自分の書いた文章を評価し、よりよい文に書き直すことができた。しかし一方で、教師の朱書きと比べるとという推敲の仕方であったため、児童の力でやりきったという実感が少ないという課題があった。

そこで、本実践ではまず「どの子ども、観察した内容を基に文章を書くことができること」を目指す。昨年度の実践と同じく生活科「ぐんぐんそだてわたしの野さい」と関わりが深い本単元を取り扱う中で、国語科の授業で学んだことが他の教科にも生かされたり、「書く」機会が日常生活のいろいろな場面にあることに気付いたりして、「書く」ことに意欲をもてるようにしていきたい。そこから、「生きてはたらく言語能力」の育成を目指したい。

(1) 単元について ②単元を通して、課題意識の連続性がある言語活動の位置付けに関わって

第1時に「どんな観察名人になりたいか」を児童に問い、観察したことをどのように表現すると名人になれるかを考える中で、単元を通じた「名人言葉」を児童と考え設定した。「名人言葉」とは、

- ・「とき」言葉 (今日は、五日前は、など)
- ・「五かん」言葉 (さわってみると、においをかいでみると、など)
- ・「たとえ」言葉 (〇〇みたいな、□□のような、など)、
- ・「はっけん」言葉 (見つけました、気づきました、など) の4つを設定した。 <実際の児童の付箋メモ>



それらの言葉を生かして、まずは五感を通した観察をし、付箋にたくさんメモを取らせた。それらを学級で交流し、この表現はどう伝わるか、どのような表現が適切かなどを話し合う時間を授業1時間分設けた。

話し合った内容を一覧にまとめ、それらの表現を自分のメモした表現と照らし合わせて言葉を選択させた。そうして、読み手に適切に伝わる文章を書ける児童を育成することを単元の出口の姿として重点的に指導した。

(2) 単位時間の学習過程について ③児童が、自己の高まりを自覚できたり、言語の主體的な使い手として自信を付けたりする終末の工夫に関わって

例えば、「名人言葉が使えたかどうか」を振り返るなど、単位時間ごとに何ができればよいかを導入で伝えておき、終末に必ず振り返りを行うことで、単位時間ごとの自己の高まりを自覚させた。また、他の教科・領域（今回は生活科の「ぐんぐんそだて わたしのやさい」の単元）と関連し、生活科で書いた観察日記（絵で表現したものを言語化した文章）と、この単元で書く記録文を比較する時間を10分程度確保することで、国語力の高まりを児童が実感できるようにした。また、それ以外の場面でどのように本単元で付けた国語力を発揮できるかを考えさせる指導を充実させた。具体的には、

- ・日常のきらり活動（よいこと見つけ）で使えそうな表現
- ・7月に学習する「あったらいいなこんなもの（話す・聞く領域）」で使えそうな表現をまとめ、提示して、これからの日常生活や学習で自信をもって表現しようとする児童の育成に重点を置いて指導した。

5 成果と課題

研究内容（1）②に関して

【成果】

「名人言葉」を使うことで、伝えたいことが表現豊かに伝わることを児童自身が実感し、単元を通して「名人言葉」を手がかりにした内容の検討、構成、記述、推敲等を意欲的に取り組むことができた。特に、自分の思いを上手く伝えられない児童、感情的な言動をする児童も、自分が表現したいことを伝えられる技能を身に付け、自分の力で内容の構成や記述に取り組むことができていた。



<実際の授業の様子 名人言葉を黒板に掲示>

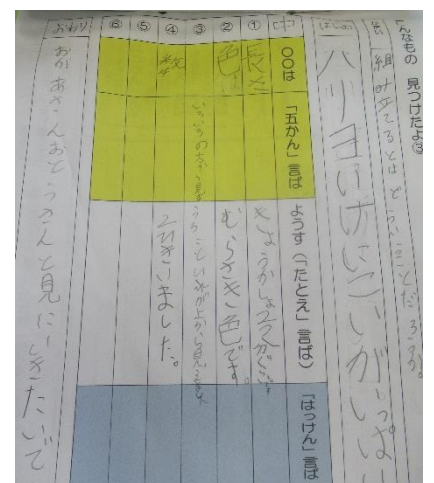
【課題】

単位時間ごとに付けたい力を更に明確にし、児童の実態に応じた指導を行う必要がある。

研究内容（2）③に関して

【成果】

終末に生活科で書いた観察日記と比較することで、「生活科で書いた文章も、もっとくわしく伝えられそう。」「五かん言葉を使ってくわしく伝えることができた。」という声がたくさん挙がった（教科研究会で構成を練った後、実際に記録文を書き進める授業を公開した際の反応）。また、その後の「こんなもの見つけたよ（書く領域）」や「あったらいいな、こんなもの（話す・聞く領域）」でも、児童は本単元で用いた名人言葉や五感を使った観察を用いた表現ができるようになっていた。



<こんなもの見つけたよの学習プリント>

【課題】

これまでの文章などと比較する際、何か基準となるものを用いて比較したり、児童の実態に応じて比較したりすることで、児童がより自身の成長を実感できるような手立てを考えていく必要がある。

生きてはたらく言語能力を高める国語科指導

～楽しくて、力がつく言語活動の工夫～

1 児童の実態

書く活動において、字数や分量を達成することに意識が向く児童の様子がみられ、そのこともあって、伝えたい内容が重複したり、つじつまが合わなくなったりするなど、文章構成を苦手とする児童が多い。また、自分が書く文章に自信がもてない児童がおり、書くことへの抵抗に少なからずつながっていることが考えられた。

2 願う子どもの姿 (研究テーマ設定の理由)

相手や目的に応じて、自分の考えが伝わるように文章を構成したり、書き表し方を工夫したりすることができる子、また、自分の文章のよさを見つけることができる子を願う子どもの姿とした。

3 研究内容

(1) 単元について

① 単元で付けたい力に即した言語活動の工夫

(2) 単位時間の学習過程について

② 本時の付けたい力に迫るための有効な指導方法、指導・援助の工夫

4 研究実践

(1) ①単元で付けたい力に即した言語活動の工夫

児童が相手や目的に応じて、自分の考えを明確にして表現できるようにするためには、言語活動を工夫する必要がある。そこで、第1次では、以下の2点に重点をおいて実践した。

- ・児童が、5つの言語意識を明確にもつことができるようにする。
- ・児童が、単元で身に付ける力を獲得するために、自らどんな学びが必要かを考え、学習計画を設定できるようにする。

同時に、児童の実態から、自分の文章の良さを実感することができる児童を育てたいと強く考えた。そのため、評価や共有の場の設定し、充実させていく必要がある。そこで、仲間と書いたものを共有する時間を単元(第2次)の後半に位置付けた。単元に入る前に、上記について明確にし、実践した。

第4学年 事実を分かりやすく報告しよう 「新聞を作ろう」

【第1次】

児童の実態から、特に付けたい力である指導目標の「思B(1)ア」と「思B(1)イ」に即して、相手や目的意識、伝えたいことが明確になる言語活動を設定した。まず、指導目標「思B(1)イ」の中の文言を以下のように捉え、解釈した。

- ・「書く内容の中心」→自分達が一番伝えたいこと・・・新聞の見出しや事実の記述、トップ記事
- ・「内容のまとめり」→それぞれの記事の内容
- ・「段落相互の関係」→記事をどの順番で配置するか、記事の大きさ等の割り付け

このことから、見出し作り、割り付けなどの過程がある新聞作りは、付けたい力に即しており、適していると判断し、言語活動を新聞とした。また、指導目標「思B(1)ア」にあるように、相手・目的意識を明確にもち、経験したことの中から選ぶには、身近な題材を新聞の記事とするのが適していると考えた。そこで本校で行っていた総合的な学習の時間の「ふるさと垂井の自然」で追究していた、相川の環境調査の報告を題材とした。このことは、教科横断的な言語活動の設定にもつながるものである。なお、新聞づくりに必要な引用や要約、事例・資料の活用の仕方などは、前単元までに学んでおり、新聞を言語活動として設定することは、学習の系統においても、発達の段階としても適していると考えた。

言語意識	本単元の具体的な姿
相手意識	3年生を中心に、全校へ発信(記述は3年生向け)
目的意識	相川の環境について報告 (調査時に、講師の先生から「ぜひ多くの人に伝えてほしい」)
方法意識	班ごとに壁新聞作り(新聞掲示⇒いつでも、何回でも。 壁新聞⇒大きい、班⇒枚数をしぼって)
場面意識	1階図書室前掲示(全校児童が見ることが可能)
評価意識	相川について学んでいる6年生からの内容評価 (本来は、5年生であるが、コロナ禍により体験ができていないため)

図1 言語意識に関わる具体的な姿

5つの言語意識は図1のように事前に整理し、第1次を迎えた。第1次の導入では、相川の環境調査で指導をいただいた講師の言葉を想起させることで、「全校に相川について報告する」という相手意識・目的意識を明確にもてるようにした。その後、児童の「全校のみんなに自分たちが調べた相川について伝えたい」という願いを基に、言語活動や言語意識に関わる思いを引き出す働きかけを行った。児童とともに言語活動を設定した後、単元の出口の姿に到達するためには、どんな学びが必要かを問うことで、児童が主体的に学習計画を作成し、単元の見通しをもつことができた。学習計画は、図2のように学習計画表として整理し、毎時間大型テレビに映した。本時の学習活動を確認したり、終末時に本時の学びを振り返ったりすることで、学習への見通しをもち、自己の学びを調整するためにも活用した。

光タイムで学んだ私たちだからこそできる！！
全校に相川調査の報告をしよう！！

十二	十一	九	七・八	六	五・四	三	二	一	活動内容	評価
									学習計画を立てる。 新聞のどくちようをたしかめる。 どんな新聞にするか、どの話題の記事を書くか、どの話題の話題を話し合う。	
									情報が正しいか、必要な取材があるか、話し合っ	
									知らせたいことが伝わる	
									知らせたい事実が分かり	
									やすくて伝わる記事を書く。	
									よりよい記事に仕上げる。	
									新聞を仕上げる。	
									新聞交流会をする。	

・図書室前に、班ごとの新聞を掲示
・六年生にアンケートで、「相川調査の内容が伝わったか」の評価をしてもらう。

図2 学習計画表

(2) ①本時の付けたい力に迫るための有効な指導方法、指導・援助の工夫

読み手に伝わる文章を構成できる児童を育てるために、情報の選択や整理、記述や推敲等の場面において、児童が言葉による見方を自在に働かせて、追究できるようになることが必要だと考えた。そこで、付けたい力に応じた導入を工夫することで、児童が、本時働かせる見方を明らかにし、追究や交流、振り返りを行うことができるようにした。本単元では、図3のように、それぞれの付けたい力に応じた導入時の指導方法を整理し、実践を進めた。

	付けたい力	学習内容	導入時
第2時	読み手に分かりやすく伝えるための工夫を見つける。(知)	新聞の特徴をつかむ	共通点を見出せるように、複数の新聞を提示する。
第3時	新聞の特徴を確かめる。(知) 集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にする。(思)	記事の話題を整理・選択	場面を設定し、目的に合った分類・整理・吟味・選択を交流する。
第4・5時 第6時	集めた情報を共有し、比較・分類したり、必要な事柄があれば取材したりして、伝えたいことを明確にする。(思) 記事の内容を根拠にして、伝えたいことを明確にした割り付けを考える。(思)	情報の共有・整理・取材 割り付け	アンケートの作成に関わって、手本となるモデルアンケートを提示する。 よさを見出すために、相違点が明らかな2つの割り付けモデルを提示し、比較する。
第7時 第9時	事実を明確にして自分が知らせたいことの記事を書く。(思) 間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているか確かめたりして、文や文章を整える。(思)	記述 推敲	場面を設定し、目的にあった内容の報告文と一緒に作る。 間違っただ文のモデル記事を提示し、全体交流で直していく。

図3 付けたい力に即した導入の工夫

【第6時】
記事の内容を根拠にして、伝えたいことを明確にした割り付けを考えるために、導入で、2つの異なる「割り付けモデル」を提示した。願いである「相川がややきれいな水であったことを最も伝えたい」を伝えたいうえで、どちらの割り付けがよいかを問い、比較した。そして、児童が気付いた「最も伝えたいことこそ、トップ記事で、スペースを多くとる。」「同じ日に行った調査の内容の記事は近い位置がいい。」「防災としての役割がある河川敷について伝えるなら、河川敷全体のルーズの写真がいい。」という意見を整理し、「どの記事をトップ記事にするか。」「どの内容の記事をどの位置に、どのくらいの大きさにするか。」「資料は何にするか。(グラフ・図・アップの写真・ルーズの写真など)」ということをし、「わりつけのポイント」とした。それらが、その後の交流や振り返りで視点となり、構成や書き表し方を考える場で、児童が積極的に活用することができた。また、5つの言語意識を念頭におき、割り付けを行う力を高めることができた。

5 成果と課題

- 系統な学びや教科横断的な単元の設定により、相手意識等が明確となった必然性のある言語活動が設定できた。児童の追究意欲が持続したことで、伝えたい事例を明確にして書くことができた。
- 付けたい力に即した導入の工夫により、書くことの様々な学習過程において、児童自らが言葉による見方を働かせて見通しをもったり、追究や振り返りを行ったりすることができた。
- 仲間同士で共有する場や6年生からの内容面で評価してもらった場を設けることで、自分の文章の良さに気付く子が増えた。
- ICTを効果的に活用して、一人一人の考えの根拠や、変更した場合の理由など変容を残していく。

6年生から「自分たちの相川調査が思い出されるくらい、事実が分かりやすく書かれていると思った。」などの評価をもらい、新聞を見た全校や先生方からも「はじめて知ったよ。驚いたよ。」などの声をかけてもらった。これらの言葉を聞いた子どもたちは、「国語は難しいから苦手だったけど、ちょっと楽しくなった。」「こんなふうを書いて伝えるのは、やっぱり便利だと思った。」などと自らの学びを振り返ることができた。今後も「国語って大切だ。役に立つな。」と実感することのできる授業を目指し、生きてはたらく言語能力を高める国語科指導を実践していきたい。

生きてはたらく言語能力を高める国語科指導

～他教科や実生活で生きてはたらく国語の力を伸ばすための指導方法の改善～

1 児童の実態

- 学校生活の中で「相手に伝えたい。」「誰かに聞いてほしい。」という機会が多く、目的をもって言葉の使い方や意味を大切にしながら活動しようとする姿がある。
- これまでの国語科学習において、作文や日記などの文章を書く機会があったものの、「誰かのために」「何かを伝えるために」といった、明確な相手意識や目的意識をもって書いたり、読んだりする機会が少なかった。そのため、「どのような書き方をすれば相手に興味をもって読んでもらえるか」「何を大切に読むと良いのか」等、考えながら学ぶ経験が少ない。

2 願う児童の姿（研究テーマ設定の理由）

表現の工夫や論の進め方を意識して読んだり、そのことを生かして書いたりすることを通して、他教科や日常に生きてはたらく姿。

3 研究内容

研究内容 1 単元で付けたい力に即した言語活動の工夫

研究内容 2 学びの実感のある授業づくりのための指導方法の工夫

(1) 追究しがいのある課題設定

(2) 自分の考えがもてる場の設定

(3) 「できた、わかった」「他でも活かしたい」という思いを確かにする終末

4 研究実践

単元名「表現の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう」 教材名『『鳥獣戯画』を読む』（光村図書6年）

1 単元の目標に対する本時の位置を明確にした単元構成の工夫

日本以外の国で育ち、日本の文化について詳しく知らない相手にその良さを分かってもらうために、どのような表現の仕方や工夫ができるかを考えることで、相手意識や目的意識をもてるようにしたいと考え、単元の出口の姿を、「ALTに日本文化の魅力をわかりやすく伝えるためのパンフレットの作成」と設定した。そのために必要な表現の工夫や論の進め方を文章から学ぶという単元構成で学習の必然性をもたせた。また、児童が目的意識や相手意識をもって必要な情報を集め、選んでいくために、日本文化について書かれた書籍にふれる機会を位置づけて学習を進めた。

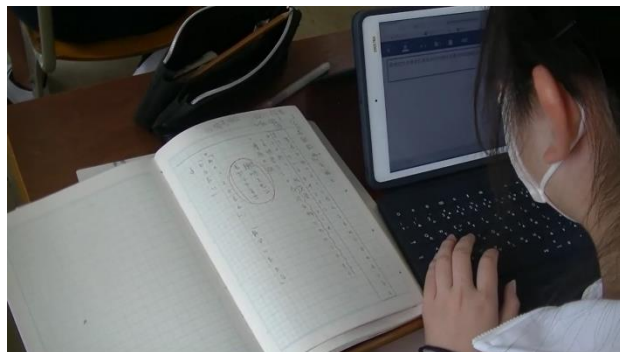
2 学びの実感のある授業づくりのための指導方法の工夫

(1) 追究しがいのある課題設定

自分が感じた文化の面白さをALTに伝えようとしても、どのように書いたらよいか分からないという現状を見つめる機会を位置付けた。そうすることで、教材文（『鳥獣戯画』を読む）の特徴である、優れた表現や論の進め方を見つけ、学びたいと必要感をもって課題を設定し、活動につなげることができた。

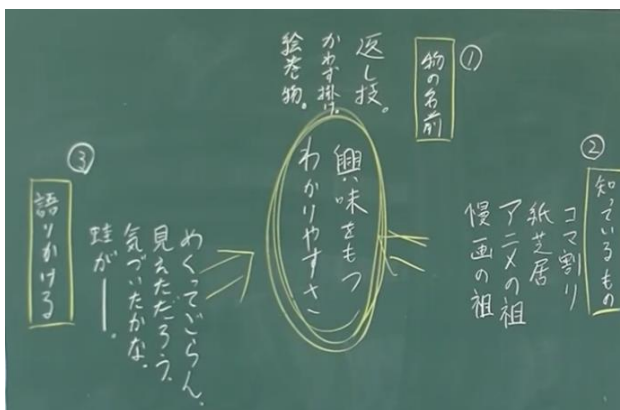
(2) 自分の考えがもてる場の設定

『鳥獣戯画』を読むの筆者が用いている表現の工夫を考える際に、「読み手の興味や関心を引くことができるのはどの表現か」「その表現を使うことによってどのような効果があるのか」といった視点を位置付けて学習を行った。また、挙手や指名によって一部の児童が意見を出すのではなく、学級全体で考えの共有、交流をするために、タブレットを使って自分の考えを投稿し、お互いにその内容を見られる場を設定した。



(3) 「できた、わかった」「他でも活かしたい」という思いを確かにする終末

表現の工夫の効果を身に付けることで、後半の学習活動を行えると考え、パンフレットの文章を書く際のポイントを、①体言止めや短い文、②具体的な数値や言い換え、③文末表現の3つに言語化し、児童が見つけた表現の工夫を分類して板書に位置付けた。「日本文化」のよさを伝える文章を書く際に、それを実際の表現に「使ってみよう」と思える活動をめざした。完成した作品を交流する場をもち、ALTに価値づけてもらい「できた」という終末を設定した。



5 成果と課題

■成果

研究内容 1

○相手や目的の設定内容と、教材の特徴（表現の工夫、論の進め方）とをリンクした学習活動を位置付けたことで、児童が読むことの意味を見いだして学習に取り組むことができた。

研究内容 2 (1)

○実際の自分を見つめる場を設定することで、「(本時)何を学ぶと良いのか」と考え、必要感のある課題を設定することができた。

研究内容 2 (2)

○タブレット端末で意見を共有する場を位置付けたことで、全員の見方や考え方を共有する機会ができ、それが表現の工夫や論の進め方について自分の頭で考えることにつながった。

研究内容 2 (3)

○表現の工夫のポイントを終末に言語化することで、学んだことを実感し、日常生活につなげようという態度となった。

■課題

●目的が「表現の工夫」と「論の進め方」を文章から学ぶことであったが、分かりやすい「表現の工夫」が中心となり、「論の進め方」に目を向けさせる手だてが必要であった。

●紹介するための文章のために使える技法として「表現の工夫」を学んだが、出口の活動がパンフレット作りのため、学んだ技法を使えない場面があり、どのように複合させるかを吟味する必要がある。

●交流のためのツールとしてタブレットの活用する場を位置付けたが、児童の学びの過程が見えないことがあった。今後は、ポートフォリオ形式のワークシートで学習活動を進めていく必要があると感じた。

